

絵文字の表情が与える印象に関する調査

坂本 果倫 (22011140@tama.ac.jp)

1. 問題と目的

本研究では「絵文字だけで受ける印象の違い」や「人間が絵文字をどのように表情認知しているか」、「絵文字の使用頻度と親和動機との関係性」などを明らかにするためにアンケートを実施した。

喜び・楽しいに当てはまる絵文字は比較的明るい印象を持たれ、怒り・哀しいに当てはまる絵文字は比較的暗い印象を持たれるのではないかと仮説を立てた。

また、親和傾向の高い親しい人間関係だと絵文字の使用頻度は高くなり、拒否不安傾向の高いあまり親しくない人間関係だと、使用頻度が落ちるか暗く・ネガティブ要素のある絵文字を使う頻度が高くなるのではないかと予測する。

2. 方法

調査対象者 多摩大学経営情報学部に所属している学生 33 人である。最終的な分析対象者は 33 人であった。学年、性別は問わず Google フォームによるアンケート形式で調査を行った。

調査日時 2023 年 11 月 16 日～11 月 23 日

質問項目と構成図 1 喜怒哀楽を表す絵文字

絵文字 1  絵文字 2 
絵文字 3  絵文字 4 

各絵文字 4 種類の印象の違いを図る為に、熊本(2018)で用いられている項目の中、基本感情「喜び」「悲しい」「好き」「高揚」「安心」「恥ずかしい」「驚き」「怖れ」「嫌い」「怒り」10 項目を使用し、各絵文字がそれぞれの形容詞にどの程度当てはまるかを 5 段階で回答させた。

次に各絵文字について使用頻度及び SNS のメッセージ送信頻度について 5 段階で回答を求めた。

最後に、杉浦(2000)の親和動機尺度 18 項目を用いた。この尺度は、分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ拒否不安(例：仲間から浮いているように見られたくない)と拒否に対する恐れや不安なしに人と一緒にいたいと考える親和傾向(例：人とつきあうのが好きだ)の二つの下位尺度から構成される。これも 5 段階評価で回答を求めた。

3. 結果

絵文字の印象についての分散分析

まず、各絵文字の印象を評価する基本感情(「好き」「悲しい」「好き」「高揚」「安心」「恥ずかしい」「驚き」「怖れ」「嫌い」「怒り」)の 10 項目の回答の平均値を算出しそれぞれについて分散分析を実施した。

その結果、「驚き」を除いたすべての項目で主効果が有意となり、ポジティブな表情の絵文字(1.4)はポジティブ感情の評定が他の絵文字よりも高く、ネガティブ感情の絵文字(2.3)は他の絵文字よりもネガティブ感情の項目の評定値が高いことが示された。

親和動機尺度と絵文字の使用に関する相関分析

各絵文字の使用頻度と親和動機尺度の拒否不安と親和傾向の平均値について相関分析を行った。(表 1)

表 1. 絵文字の使用頻度親和動機尺度間の相関関係

	M	SD	絵文字 1	絵文字 2	絵文字 3	絵文字 4	拒否不安	親和傾向
絵文字 1	3.42	1.48	-	0.546 **	0.266 ns	0.341 -	0.024 ns	-0.012 ns
絵文字 2	2.30	1.38		-	0.296 -	0.325 -	0.113 ns	0.174 ns
絵文字 3	2.18	1.42			-	0.385 *	-0.221 ns	0.066 ns
絵文字 4	3.88	1.37				-	0.114 ns	0.507 **
拒否不安	3.07	0.96					-	0.461 **
親和傾向	3.65	0.85						-

n=33

この結果から絵文字 4(楽)の使用頻度と親和傾向には中程度の正の相関があった。 $(r=.507)$ 。それ以外の絵文字の使用頻度と親和動機尺度とでは有意な相関関係は見られなかった。

4. 考察

絵文字の表情に対して各形容詞が当てはまる程度について分散分析を行った結果から、絵文字の表情の読み取りは目の効果や口角の上下が重要になると推測される。また、絵文字の使用頻度と損和動機尺度の相関分析を行った結果から、親和傾向が高い、すなわち親しい人間関係では、不安を感じる事が少なく一緒にいたいという思いから、明るく・ポジティブ要素のある絵文字がよく使われる可能性があるのではないかと考えられる。

5. 引用文献

熊本忠彦(2018). 顔文字を対象とする印象と感情の相互交換手法の提案～読み手が感じる「印象」と読み手が推測する書き手の「感情」を対象して～FTT2018(第 17 回情報科学技術フォーラム)CJ-007

杉浦健(2000). 2 つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化—教育心理学研究 48. 352-360